被災地からの贈り物

岩手県・陸前高田市「シャポー IWATE」プロジェクト

手作りのタオル帽子を全国のがん患者へ

この春、岩手県内にある仮設住宅の住民が、全国のがん患者へ手作りのタオル帽子を届ける「シャポーIWATE」プロジェクトが始まった。

根岸しのぶ

私の今回の旅の第一の目的は、お地蔵さんの人形を被災者の方に届けることでした。私がお地蔵さんの人形の作り方を習ったのは3年程前のことでしたが、傘を被って、手を合わせて、数珠を下げて拝む姿は愛らしく、近親の方などが亡くなった折に届けるために作っていました。拝む気持ちを届けるつもりでした。震災では、家族を亡くしたり、まだ遺体も見つからない方も多いというニュースを聞くたびに、私でもできることはないかなと思っていました。そんな折、姉にお地蔵さんを被災者に届けるのはどうかな?と提案した所、陸前高田の避難所に居る方々に渡せることになり、細根沢サロンと言う集会所に各避難所からバスで集まって来て、お茶を飲みながら三角巾を作っていた被災者の方々に渡すことができました。7月中に24体作成し、陸前高田市観光物産協会副会長の實吉さん宅に送らせていただき、当日受け取り全員の方に手渡すことができました。ある老婦人が身内の方を15人も亡くしているので、これから1日に何度も拝めると喜んでいたそうです。それを聞いて私も嬉しかったです。

今回のようなことが実現したのは、姉の人脈の広さだなあと姉には脱帽です。私だったら思ってはいても結局何もできなかっただろうと思います。旅の第2の目的は、東北の被災地を見てみるということでした。気仙沼大島の休暇村に2泊して、気仙沼と陸前高田を見たわけですが、2年前に水戸で見たような瓦礫とブルーシートは見られなかったけれど、特に気仙沼港の辺りなどは何も始まってない感じを受けました。陸前高田では山を崩し、地面を12メートルも高くするという計画で、ベルトコンベアーが張り巡らされて土を運んでいました。ダンプカーでは10年かかる所1年半位でできるそうですが、住宅地を作って人が住めるようになるには、まだまだ長い年月が必要だなあと感じました。最後に今回の旅では、被災された語り部の人から直接お話を聞くこともでき、東北の人達が少し身近になった気がします。。

東京都新島の石を使った五百羅漢プロジェクト(陸前高田市の普門寺)

NPO法人 ハロードリーム

10年アリガトウ・プロジェクト

一般社団法人 つむぎや　代表:友廣 裕一(ともひろ・ゆういち)氏

被災地の力になりたい

https://www.facebook.com/TUMUGIYA

牡鹿半島の小さな漁村から、かわいらしいネックレスとピアスが生まれた。つくり手は浜のお母さんたち。1つひとつ丁寧にこしらえるアクセサリーブランド“OCICA”(おしか)は、口コミで販売店を増やし、今や海外のミュージアムショップにも並ぶ。シカの角と漁網の補修糸を用いた“OCICA”は、つくり手たちが真剣に悩み、苦しみ、しかし成長を実感しながら生み出した珠玉の作品だ。

倭文年江

第2回の東北の旅に8/18～8/20の間行ってきました。すでに震災から3年半も過ぎていて、ニュースになるのはほんの一部だけで復興の実態がよく見えないこと、復興予算の流用とか仮設住宅での暮らしの中で心が折れていってしまう方が多いことなど、心配しているより自分の目で確かめようと前回のメンバーに声をかけプランを立てました。そして、陸前高田の語り部の方ととも東京吉祥寺であった物産展で知り合いましたから相談を進め、私の妹が手作りで作ったお地蔵様を仮設住宅の方達にお届けする企画が実を結びました。そして、密かに願っていた12年前に植林した若木達の行く末を確かめることも叶いました。

初日は唐桑の畠山さんに幸運にもお会いできて元気一杯のお話を聞くことができ、ルイヴィトンのような支援のスタイル（牡蠣の工場の人件費をポンと出す）こそ、本当の復興に結びつくのに…と融通の利かない日本の実情が情けなかったです。形だけにこだわって、一律配布のために食糧など配らずに腐らせたり家電製品などはお手盛りで配ったりと、嫌な話を沢山聞きましたから。

翌日は陸前高田に行ったのですが、予想外の景色に唖然としました。巨大なパイプが林立していて町はずれの小山を削った土砂がパイプの中のベルトコンベアーで運ばれどんどん積まれていくのです。何だか宇宙基地を見ているような無機質な世界に言葉もありませんでした。以前見た瓦礫の山と住居の土台だけの広大な土地にも言葉を無くしましたが、これが復興のスタイルなのか?14㍍にもなる巨大防潮堤さえ出来れば事足れりとする、そこに住む人たちの生活を考えない建造物ありきの考え方とぴったり重なって腹が立って仕方なかったです。パイプを張り巡らせるのに139億円かかっていると聞いて更に頭に来ました。午後からはお茶っこの会の三角巾造りに混ぜて貰ってお話ししながら、お地蔵様を手渡しました。手を合わせる縁が出来たととても喜んでくださり、妹も頑張った甲斐があった（24体作りました!）と喜んでいました。その後普門寺にいって、浅草の回向院でお披露目されたお地蔵様に参拝したり、五百羅漢造りをしている方達からお話を聞いたりしました。その夜は前回知り合った気仙沼大島の小山さんから写真や資料を沢山見せて貰って、前回見たブルーシートの内側で酷い被害があったことにあらためてビックリしました。

最後の日は折壁という駅に降り立ち其処から蟻塚公園を目指す途中タクシーの運転手さんに事情を説明。多分此処でしょうと連れて行ってくださった場所に既視感が有りました。若木の大きさもほぼ推定通り。目印も何もなかったですが、雑草にもめげずしっかりのびている姿を記録してきました。震災の時に僕たちの植えた木はどうなってしまったかと案じていた生徒達に教えてあげようと思っています。その後、気仙沼港に戻って復興屋台村で漁師の賄い丼に舌鼓を打ってからリアスアーク美術館に行きました。スタッフが撮影した写真に添えられた説明文に何よりも胸を打たれもっと多くの人に見て欲しいと強く思いました。音、におい、震災前の日常…この地に暮らしてきた人だからこそ持つ感覚や記憶。言葉の力を感じました。展示という形を与えることで、あの震災を伝える地域の美術館の取り組み。「忘れないぞ」という強い思いを受けとりました。私達の仕事は、この思いを沢山の周りの人達に伝えていくことなのだと今回の旅で思いました。

詩と絵でつづる 陸前高田

～大震災を乗り越えて～

前略
先日は、細根沢サロンに来て下さいまして、
ありがとうございました。
そして、手作りのお地蔵様を皆に届けて頂き
まして感謝でいっぱいで何とお礼を言って
良いのかわかりません。
ほんの私たちからの気持ちとして、
私たち二人の本をプレゼント致したいと
思います。読んでいただければ幸いです。
では、御礼まで…。

吉田 恵美・由美

定点観測＜気仙沼にて＞　萩原康子

JR気仙沼駅に降り立ったとき、二年半前には漂っていたヘドロと土の臭いは消えていた。町は清潔で、ここまで復興したのかと嬉しかった。ところが、その喜びは一瞬だった。中心街を少し外れると、家の土台ばかりが目につく。気仙沼大島に渡る連絡船の桟橋もまだなくて、海の中にコンクリートの柱だけが立っていた。

気仙沼を訪ねるのは、今回で三回目である。2002年の5月、世田谷区立八幡中学校の三年生の修学旅行の地は気仙沼だった。生徒たちの心の中に、環境問題の大切さと自然の豊かさを根付かせたいと、森も海もある気仙沼が選ばれた。宿舎は二泊とも離島の気仙沼大島にある国民休暇村だった。素晴らしかった修学旅行の思い出は、生徒と教師を強い絆で繋いでくれた。だからこそ東日本大震災のとき、テレビから流され続けた燃える気仙沼の映像に、どれほど心が痛んだことか！みんなで集めた義援金と励ましのメッセージを、修学旅行でお世話になった牡蠣漁師の畠山重篤さんに渡しに来たのが、2012年の3月だった。震災から一年がたっていた。そのときは、美しかった海や町の無残な姿に声を失った。町のいたるところが陥没し、海水が溢れていた。そして、今回（2014年8月18日～20日）である。あれから、二年半で、どのように変わったかをこの目で確かめたい。その後の様子を畠山さんからも聞きたかった。

長年の活動が認められ、2012年、国連から世界で100人の「森林ヒーロー」に選ばれた畠山さんは多忙を極めているが、時間をやりくりして私たち（元教師四人）に会ってくれた。場所は気仙沼湾にのびた唐桑半島の西舞根（にしもうね）。海の資源は戻り、牡蠣とホタテの養殖の工場が立ち、活気が戻ってきていた。五十年前、フランスの牡蠣が赤潮の被害で全滅したとき、稚貝を送った縁でフランスのルイ・ヴィトン社が強力に支援していた。畠山さんは「ルイ・ヴィトンの社長さんが使い道を問わず援助してくれたのが本当に助かりました。本当に必要なのは、形には残らない人件費だったんですよ」と言う。周りの漁師の家は高台にあった彼の家以外ほとんど流された。漁師が仕事がなく仮設に籠っているのはよくないと、身銭を切って雇っていたので、無条件の援助はどれだけ助かったことだろう。

先日、天皇・皇后両陛下が東北の被災地を訪問されるとき、「両陛下が会いたがっているので、都合をつけてほしい」との打診が宮内庁からあったそうだ。その日は講演を頼まれているので断ったら、宮内庁の人が言ったそうだ。「陛下が『畠山さんが東京に来た折に、ぜひ皇居にきてほしい、と伝えてください』と言われました。陛下に会えるのを断って、それでも皇居にきてほしいと言われた人は初めてです」。彼は、行政の計画した全く海を見られない巨大な防潮堤は、海の生態系を変えてしまうし、津波には無力なので必要ないと説く。この人の逆境に負けない精神力と懐の大きさは日本の宝と思った。

宿舎の「休暇村　気仙沼大島」でも、職員の人から率直に現状を話してもらった。美談ばかりでなく、人間性を疑うような話もあった。一番悲しいのは、ここでは仕事がないので、若い人たちがどんどん島を出てしまうことだとか。震災前3200人だった島の人口は今では2700人に減ってしまった。「緑の真珠」と讃えられた美しい島の自然は、完全に戻ってきていたが……。

今回特筆したいのは、修学旅行のとき、みんなで植えた苗木の成長を確かめられたことである。畠山さんの主催する「森は海の恋人」運動―「牡蠣の育つ美しい海のためにはその背後にある山を育てることが大切」―に賛同し、気仙沼湾に注ぐ大川の上流にある室根山に植林したのだ。何しろ12年前のことで室根村役場に聞いても、その場所は分からなかった。あきらめきれなくて、私たちのおぼろげな記憶を総動員し、地元のタクシーの運転手さんに事情を説明して推定してもらい、ほぼここだと特定できるところに辿りつけた。木々は二メートルくらいに育ち、私たちの背丈を超えて、すくすくと育っていた。